

小・中学校国語教科書ひばり教材考

——一九五〇年度以降の採録状況の概観を中心に——

今 井 正之助

はじめに

小・中学校国語教科書でひばりを見かけることが少なくなつて久しい。教科書の世界からまったく姿を消したということではなく、「歳時記（きせつ）の言葉」の中の「動植物 春 ひばり あさり つくし」（『ひろがる言葉 小学国語 3上』学校図書、二〇一五年）のような形で残っている。しかし、教材（作品）としての存在感が急激に失われていることは、副題に示した作業からはつきりと浮かびあがる。その理由の究明には、個々の教材の内容・表現などの検討が求められるが、実際にひばりを見かけることが少なくなつたことも大きな要因であろう。公益財団法人日本野鳥の会「ひばりは どこに？〜見かけなくなつた、春の風物詩〜」（<http://www.wbsj.org/activity/conservation/research-study/>

hibari）は、次のようにはじまっている。

のどかな田園で陽気なさえずりを響かせ、空高く舞い上がっていくヒバリ……。かつては春の風物詩として、だれもが知っている身近な野鳥でした。しかし近年、都市部などではその姿を見かけなくなりました。丈の低い草地を好むヒバリは、開けた原っぱや麦畑などに生息していますが、土地の開発や農業の衰退などによって草地環境が消失・荒廃し、近年ではヒバリやセツカ、ウズラといった草地性の野鳥も減少しているのです

ただし、稿者は「かつて」の風物詩を現実のものとして知っているわけではない。手元の図鑑（高野伸二編『日本の野鳥』山と溪谷社、一九九〇年第一〇刷）三八二頁に「日本では北海道から九州までの全国で繁殖し、積雪の多い地方に棲む個体は、冬期は暖地へ移動する」と生息地の説明がある。しか

し、生まれ育った岐阜県山間部ではその記憶がない。あまり気にもとめないでいたが、日本野鳥の会大阪支部の広報誌「むくどり通信」二一八号（二〇一二年三月号）「和田岳さんの身近な鳥から鳥類学 7 ヒバリはどこに生き残るのか」(<http://birdsukan.web.fc2.com/chouruigaku/007/index.html>) に以下の一節があった。和田氏が二〇一一年の五月に、農耕地で繁殖する鳥の分布調査のために、大阪府内の農耕地のあちこちを自転車で走り回ったところ、

まず標高が高くなるとたんにヒバリはいなくなりまして。広い田んぼがあるのに、能勢町や豊能町、茨木市や高槻市の山間部にはほとんどヒバリはいません。もう一つ、狭い田んぼにもヒバリはいません。

というのである。郷里はこの二つともに当てはまり、私がうかつだったばかりではないかもしれない。川口孫治郎『飛驒の鳥』（郷土研究社、一九二二年。名著出版の復刻版による）「ヒバリの分布」に「飛驒には、ヒバリが至つて少い。高山町付近では、唯、灘村の岡本の田圃に稀に巣くふことがあるのみである。（中略）益田郡（注：稿者の郷里、現下呂市）では何処かにもるかも知れないが、あらば竹原方面で、其外にはみないやうである」とある。『萩原の風土と生きもの』〔岐阜県益田郡萩原町教育委員会、一九八四年「萩原で見る野鳥」一八種の中にも、ひばりは取り上げられていない。

ところが、三〇歳代半ば、周囲に農耕地が残っている愛知

教育大学に着任した後のある春日、近辺を散策していると、にぎやかな鳴き声が降ってきて、見上げると小さな黒い鳥影がひとつ、小刻みに中空に揺れていた。その鳴き声をうまく描写できないが、複数のさえずりがせわしく入り混じったように聞こえる。川村多実二『鳥の歌の科学』（中央公論社、一九七四年。一七九頁）は次のように述べている。

「空鳴き」または「舞鳴き」の替え文句は非常に数が多く、優良な鳥になると一五種くらいも備えている。（中略）試みに右の替え文句を列べてみると、

チーチビ	チーチビ	ー	ー	チユクチユク
チー	チユクチユクチー	ツウイ	ツウイ	ツウイ
ピチ	ピチ	ピチ	ピチ	ピーツツチー
ピーツツチー	チールー	チールー	ツオイ	ツォ
イ	ツオイ	ツオイ	リュ	リュ
リュ	ピー	ピー	ピー	ピー

すなわち立派にヒバリの囀りが組み立てられるのである。この替え文句の配合、続きぐあい、おのおのの音色、余韻等によつて優劣巧拙の差が生ずるので、雄一羽ごとに異なるから、この鳥ほど個体差の顕著なものはない。ともかく、小さな、しかし高性能のスピーカーを空に浮かべたような鳴き声とその様態（ホバリング、停空飛翔）によつて、ひばりをはっきりといちどきに脳裏に焼きつけた。同時に、昭和の歌謡界に君臨した「美空ひばり」の名の含意する

ところはこれだったのか、とも勝手に納得した。空高く鳴くのは雄であるけれど。

以来、ひばりの登場する教材に関心をいだいてきた。なかでも、坂本遼の詩「春」（唯一小中学校両方の教科書に採録された教材である）について考えるところがあるが、別稿にゆずり、ここでは小・中学校国語教科書に載ったひばり関連教材を閲覧してみた。

〔凡例〕

1. 作品（教材）の検出は、東書文庫蔵書検索*によった。

* (<http://www.toshobunko.jp/opac/TBSearch>)
小・中学校、昭和二四年以降の国語教科書のみ作品名で検索可能)

『教科書掲載作品』小・中学校編（読んでおきたい名著案内）（日外アソシエーツ、二〇〇八年）、『小学校国語教科書題材データベース』（神奈川県立総合教育センター）にも目を通したが、標題から察知しづらい作品を見落としている可能性がある。

2. 当該教科書の使用年度は教科書図書館「教科書目録情報データベース」(<http://textbook-r.co.jp/library/search/index.html>) の記載によった。

3. 各ヒバリ教材の筆者・出典は、記されていないことが多く（特に小学校教科書）、教科書指導書の記載によった。

ただし、指導書を披見できなかったり、指導書にも不記載の場合は、稿者の調査結果を、項目番号の頭に「*」を付して示した。教科書本文と出典との間に異なる場合は注記した。典拠の確認には国立国会図書館デジタルコレクションの恩恵が大きかった。

4. 教科書・指導書は、主として教科書図書館、愛知教育大学附属図書館の蔵書を披見し、相互貸借、複写依頼などによって補った。改訂時期の教科書は確認するようつとめたが、果たせなかったものも少なくない。

5. 採録項目

記号（小学校 a ～ p、中学校 A ～ J） 作品題名・作品著作者（冒頭の一節。改行、文字の空きは原則として非表示）、①種別、②作者紹介（『日本人名辞典』、『デジタル大辞泉』を参照。それ以外は個別に注記）、③出典、④発行者『教科書名』（教科書図書館データベースの表示による）、⑤教科書番号・使用年度、⑥備考。※④⑤は発行者ごとに適宜一括した。

一、小学校ひばり教材一覧

I 一九五〇（昭和二五）年度以降使用開始

a ひばり…野口雨情

(ひばりはうたをうたつてる。畑のうたをうたつてる。あさからばんまでうたつてる。…)

①童謡。②のぐち・うじょう、1882～1945。明治～昭和時代前期の詩人。作曲家中山晋平とのコンビによる作品はひろく愛唱された。茨城県出身。作品に「船頭小唄」「波浮の港」「七つの子」、童謡集に『十五夜お月さん』など。*③『定本野口雨情』第三卷(未來社、一九八六年)収録。「ひばり」は『青い眼の人影』(一九二四年、金の星社)「海ひよどり」の中の一編。「海ひよどり」は『童話』一九二二年一〇月に発表(定本)解題)。④日本書籍『太郎花子こくこの本 ひばりのうた 二年上』、⑤小国 218：1950～1951、小国 250：1952～1953 / ④『太郎花子こくこの本 二年上 ひばりのうた 改訂版』、⑤小国 2204：1954～1958

b ひばりのおうち…佐藤義美

(ひばりのおうちはむぎばたけ。だんだんばたけのどこですか。げんげをつんで、すみれをつんで、…)

①童謡。②さとう・よしみ、1905～1968。昭和時代の童謡詩人、童話作家。童謡「グッドバイ」「いぬのおまわりさん」などで知られる。大分県出身。*③『佐藤義美全集Ⅰ』(佐藤義美全集刊行会、一九七三年)収録の『大ナミ 小ナミ』(富士出版社、一九四二年)

「ヒバリノ オウチ」は第二連に異同があり、『全集Ⅰ』収録の『ボクト キミ』(日本書院、一九四七年)「ヒバリノ オウチ」が教科書の典拠。④教育出版『こくこの上』、⑤小国 252：1952～1953 / ④『改訂こくこの上』、⑤小国 2210：1954～1960

c ひばりのたまご…村山俊太郎

(ほくは、あぜの下に、うずくまっている。ほくは、日に光る草の中に、からだをかくしている。…)

①詩。*②むらやまーとしたろう、1905～1948。昭和時代の教育運動家。福島県出身。*③梶村光郎「村山俊太郎の年譜・著作目録」(琉球大学教育学部紀要 67、二〇〇五年九月)に「1929 (昭和4)年5月1日、(童謡)ひばりのたまご、読方綴方鑑賞文選(尋常二年)、文園社」とあるが未確認。④中教出版『国語の本 五年上』、⑤小国 583：1952～1954

d ひばりのひっこし…イソップまたはラ・フォンテーヌ

(麦畑の中に、ひばりの家がありました。麦が黄色くみつつて、あちらでもこちらでも、麦かりを…)

①物語。*②Aesop/Aesop。『イソップ物語』の作者とされる前六世紀ころのギリシヤ人。解放奴隷ともいわれるが、生涯についてはほとんど不明。②Jean de

La Fontaine、1621～1695。フランスの詩人。イソップの寓話などをもとに、巧みな韻文で書いた『寓話集』は寓話文学の傑作として有名。*③未確認。教科書の中心人物は〈ひばりのおとうさん〉。『ひらがないそつぷ』(文園社、一九二六年)「かしこいひばり」は〈おつかさんのひばり〉。『ひらがなイソップ二年生童話』(イソップ原作、谷崎伸編、金蘭社、一九三五年)「ひばりとむぎかり」は〈お母さんひばり〉。『イソップのお話 新版(岩波少年文庫)』(河野与一編訳、岩波書店、二〇〇〇年)「ひばりと農夫」は〈親ヒバリ〉。『子どものためのラ・フォンテーヌのおはなし』(こぐま社、二〇一五年)「ヒバリとヒバリの子とおひやくしよう」は〈母さんヒバリ〉。上記は記述にも種々の異同があるが、教科書のように〈おとうさん〉とするものは少ない。引越しのような家庭の重要事の決定権は父親にある、という観念による改訂か。④中教出版『国語の本 三年上』、⑤小国 356: 1952～1954

e やさしいひばり・浜田広介

(第三節に冒頭部引用)

①物語。②はまだ一ひろすけ、1893～1973。大正～昭和時代の児童文学作家。作品に「泣いた赤鬼」「椋鳥むぐとの夢」など。*③教材末尾に「はまだ ひろすけの

ぶんによる」とある。『こぶたのペエくん』(日本書房、一九五四年)所収「やさしいひばり」が典拠作であろう。上記作は「ひろすけ幼年童話文学全集6」(集英社、一九七〇年)に「ひばりともぐら」として再録。この二者には漢字・仮名の表記以外の大きな異同はない。教科書には末尾に「もぐらの 子どもは、「ありがとう、ひばりさん。」といって、あなの 中へ ひっこみました。」の一文が付加されている。逆に、典拠作中程の「あおぞらの たかい ところに、ぼっちりと 小さな ひばりが みえました。くびを のびして みて いると、」が教科書では削除されている。稿者の関心からは残念。④日本書院『こぐま』2年上』、⑤小国 2:266: 1957～1960

II 一九六〇(昭和三五)年度以降使用開始

f ひばり…その一アイヌの伝説、その二イソップ

(一)むかし、ひばりは、天上に住んでいた。ひばりは、天の神様に…。二)麦畑の中に、ひばりのすが…)

①物語。②教科書末尾に「はじめの話はアイヌのでんせつ、次のはイソップ物語に出ている話」と注記あり。*③「アイヌの伝説」は、『石森延男児童文学全集第4』(学習研究社、一九七一年)『うつくしいマリモ』収載

の「ヒバリのやくそく」の抄録再話か。『少女少女日本
の民話・伝説8』（北海道の巻、二反長半編著、市
川禎男絵。偕成社一九六三年）に「ひばりのお使い」
が載る由だが未見。「イソップ物語」はd「ひばりのひ
っこ」の類話。fは〈親ひばり〉とするが、『イソッ
プのお話新版（岩波少年文庫）』とは文章が異なる。
④ 光村図書出版 『小学新国語四年上』、⑤ 国語 4011：
1961～1964

g ひばりの歌：水上不二

（わたしはけさも三時に目がさめました。麦の中で夜
あけを待ちました。光のはしごを上って行きました。）

① 詩。② みずかみーふじ、1904～1963。詩人、童話作
家、絵本作家、作詞家。宮城県気仙沼市生まれ
[Wikipediaによる]。③ 異聖歌著『詩の味わいかた』指
導書は牧書房とするが「牧書店」、一九五四年）所載
の「ヒバリの報告水上不二」。傍線部は「わたしは天
の案内者です。けさも三時に目がさめました」とある。
「光のはしごをのぼっていききました」につづく部分「小
学校の屋根に旗がゆれ、太陽のなかはあたたかです
た。」が教科書では「学校の屋根に旗がゆれ、川はひ
とすじのおびでした」。この方が天空からの視覚表現
に統一され、近景から遠景への広がりが生まれる。詩

全体もより洗練されている印象をうける。指導書に断
りがないが、これらの改編は水上の手になるか。④
信濃教育会出版部 『国語 五年上』、⑤ 国語 5021：
1961～1964 / ④ 『国語 六年上』同、⑤ 国語 6037：
1965～1967、国語 6049：1968～1970

h ひばりの話：内田清之助

（冒頭部は③に引用）

① 説明文。② うちだーせいすけ、1884～1975。明治
（昭和時代の鳥類学者。著作に『日本鳥類図説』『鳥
学講話』など。③ 指導書は「四季の鳥四季の魚」とす
るが、『四季の鳥・季節の魚』（さ・え・ら書房、
一九五三年）収録の「雲の上の王様ヒバリの話（三月）」
をさすと思われる。これが直接の出典だとすると、教
科書の「ひばりの話」は大きく改編されている。典拠
の書き出し「羽のさをふるわせながら『ピーチュル、
ピーチュル』と高い空でのどかに鳴いているヒバリは、
ほんとうに春の雲の上の王様のようにですね。どうして
ヒバリは、このようにたえまなくないているのでしょ
うか。」は、教科書では「あたたかい春の日に、雲に
とどくほど高い空から『ピーチュル、ピーチュル。』と、
ひばりの楽しそうな声が聞こえてきます。ひばりは、
どうしてあんなに鳴きつづけるのでしょうか。」とあ

る。また、「ヒバリはよくひらけた平野にすんでいますが、鳴く時にはまるでエレベーターでもあがるように、まっすぐに空にまいあがり、ある高さまでのぼると、そこで空中にとまって、鳴いているのです」（小稿「はじめに」に述べたホバリングさえすりの描写）が教科書では削除されている。④二葉（1962）から発行者変更、教育出版）『国語 三年下』、⑤国語 3004：1961～1967

i ひばりの日記…（不明）

（五月六日（木曜日）晴れ／田中君が、「おもしろいものを見せてやるから、ついてこないか。」といったので…）

①日記形式の物語、*③不明。『小学国語三年上 指導書』（大阪書籍、一九六六年）を参照したが、作者・出典の記載なし。同じ單元「よく見て書こう」にある「子もり」については、「出典は、『よい詩よゝ文』（四年生）国分一太郎編、三十二年新評論版。当時、静岡県駿東郡裾野東小学校児童、高杉利光君の作品である。」と明記されている。「ひばりの日記」は教科書編者が児童の日記風に執筆したものか。④大阪書籍『小学国語三年上』、⑤国語 3031：1965～1970

j ひばりのす…木下夕爾

（冒頭部は③に引用）

①詩。②きのした・ゆうじ、1914～1965。昭和時代の詩人、俳人。短詩型の叙情詩にすぐれ、詩誌『木靴』を主宰した。詩集に『生れた家』、句集に『遠雷』など。③『小学新国語』指導書は『児童詩集』（木靴発行所、一九五五年）をあげるが未見。『国語三上わかば』指導書は『定本木下夕爾詩集』（牧羊社、一九六六年）。『小学新国語』は「ひばりのす、／見つけた。／まだ、だれも知らない。」のように句読点あり。『国語三上わかば』は「ひばりのす／みつけた／まだたれも知らない」。④光村図書出版『小学新国語 三年上』、⑤国語 3035：1965～1967／④『国語三上わかば』、⑤国語 309：1980～1982、国語 319：1983～1985、国語 329：1986～1988

k ヒバリと風船…石森延男

（わたしは、冷たいような、なまあたたかいようなわか草の上にねころんで、じっと空を見つめています。）

①物語。②いしもりーのぶお、1897～1987。昭和時代の児童文学者、国語教育家。日本児童文学会初代会長。北海道出身。③指導書は出典を「編集委員の書きおろ

し石森延男」とするが、『ふるさとの絵』（三省堂、一九四〇年）「雲雀と風船」の改訂版というのが正確か。

④ **光村図書出版** 『小学新国語 六年上』、⑤ 国語 6043：1968～1970

Ⅲ一九七〇（昭和四五）年度以降使用開始

1 天のふえ…斎藤隆介

（ある時、とつぜん雪が降ってきて、地面は一面まっ白になってしまった。雪は、いつまでたっても…）

① 物語。② さいとうりゅうすけ、1917～1985。昭和時代後期の児童文学作家。絵本に滝平二郎の切り絵による『八郎』『花さき山』などがある。東京出身。③ 日本書籍の学習指導書に「出典 愛蔵版 わたしのほん『ペロ出しチョンマ』（理論社刊）」とあり。教育出版の指導書は未確認。両社の教科書の「天のふえ」は漢字／仮名、平仮名／片仮名の相違、読点など小異あり。理論社刊『ペロ出しチョンマ』は未確認。『斎藤隆介全集第1巻短編童話1』（岩崎書店、一九八二年）は、理論社刊本（一九六七年）に拠ったというが、作品名は『天の笛』である。

④ **日本書籍** 『小学国語 4上』、⑤ 国語 4011：1971～1973、国語 4091：1974～1976

m ひばり…砂村秀治

（ひばりは、すずめより少し大きな小鳥です。はねの色は、すずめと同じように、かれ草や土のような色を）

① 説明文。② ③ 一九七二・一九七四年指導書「東京教育大学付属小学校教諭砂村秀治氏の書き下しである」、一九七七年指導書「元東京教育大学付属小学校教諭、砂村秀治氏の文章をもとに教材化した」。④ **東京書籍** 『新しい国語3上』、⑤ 国語 3031：1971～1973 / ④ 新訂新しい国語3上』、⑤ 国語 3061：1974～1976 / ④ 新編新しい国語3上』、⑤ 国語 3131：1977～1979

n 春…坂本遼

（詩句全文を第三節に引用）

① 詩。② さかもとりょう、1904～1970。昭和時代の詩人。昭和2年郷里兵庫県の方言による農民詩集「たんぼぼ」を刊行。戦後は、竹中郁らと児童詩運動をすすめ、雑誌「きりん」を主宰。③ 『詩集たんぼぼ』（銅鑼社、一九二七年）。④ **光村図書出版** 『小学新国語 五年上』、⑤ 国語 5141：1977～1979 / ④ 国語 5上

銀河』⑤国語 509：1980～1982、国語 519：1983～1985、国語 529：1986～1988、国語 541：1989～1991

Ⅳ一九八〇（昭和五五）年度以降使用開始

○ひばり・間所ひさし

（詩句全文を第三節に引用）

①詩。②まどろろーひさし、1938～2019。主な作品に、詩集『山が近い日』（理論社）、『チャコのアルバム』（章炎社）などがある。東京都生まれ〔京都市民報 Web「おはなし絵本館」・他〕。③『山が近い日 間所ひさし少年詩集』（理論社、一九七四年）。④学校図書『小学校国語 三年上』、⑤国語 325：1986～1988、国語 337：1989～1991

Ⅴ一九九〇（平成二）年度以降使用開始

Pヒバリ ヒバリ・加藤多一

（第三節に冒頭部引用）

①物語。②かとうーたいち、1934～。昭和後期～平成時代の児童文学作家。北海道にすみ、その風土と人間、離農問題などをかきつづける。北海道出身。*③『国語教材研究大事典』（明治図書出版、1992）「ヒバリ

ヒバリ」1書誌(1)教材史に「ヒバリ ヒバリ」の初出は『三年生の童話』（一九七三年 小学館）で、のち短編集『ふぶきだ走れ』（一九七六年 北海道新聞社）に収録された。長らく絶版になっていたが、一九八八（昭和六三）年岩崎書店から新版として刊行された」とある。④大阪書籍『小学国語 3上』、⑤国語 305：1992～1995 / ④日本書籍『わたしたちの小学国語 4上』、⑤国語 401：1992～1995

二、中学校ひばり教材一覽

Ⅰ一九五〇（昭和二五）年度以降使用開始

A佐吉とひばり・中村草田男

（ひとりでたくさんのよび名ーというよりあだ名を持っているあんまさんがありました。本名は佐吉と…）①童話。②なかむらーくさたお、1901～1983。昭和時代の俳人。清（中国）厦門生まれ。昭和九年高浜虚子の『ホトトギス』同人となり、二二年『万緑』を創刊、主宰。句集に『長子』『銀河依然』など。③教材末尾に「雑誌『文学界』による」とあり、同誌第二卷一〇号（一九四八年一〇月）に「一雲雀ーメルヘン」が

載る。「一雲雀」は『風船の使者』（みすず書房、一九七七年）、「中村草田男全集Ⅱ」（みすず書房、一九八七年）に収録。④『教育図書』『国語 中学校第三学年用（一）』、⑤中国 910：1950～1954

B 春の朝（春のあした）：ブラウニング原詩、上田敏訳

（時は春／春は朝／朝は七時／片岡に露みちて／あげひばりなのりで／神そらにしろしめす／…）

①詩。② Robert Browning、1812—1889。テニソンとともにビクトリア朝のイギリス詩を代表する人物。人間性に対する信頼と楽天主義を表現した。「神、そらに知ろしめす。／すべて世は事も無し。」（上田敏訳。「ピッパが通る」はこの思想の表明としてあまりにも有名である。〔日本大百科全書（ニッポニカ）〕。②うえだーびん、1874～1916。明治～大正時代の外国文学者、詩人。西欧の文学、特にフランスの象徴詩の名訳で知られる。訳詩集『海潮音』、詩訳詩集『牧羊神』、小説『うづまき』など。東京出身。③三省堂出版『中等国語 三上（改訂版）』は教材末尾に「上田敏訳『東西名詩集』による」と記す。『東西名詩集 吟詠漢詩集』（大日本雄弁会講談社、一九三六年）か（未見）。同上（三訂版）以下は『海潮音』をあげる。『海潮音』（本郷書院、一九〇五年）「春の朝」の末尾に「ブラウニン

グー『ピパの歌』』とある。『定本 上田敏全集Ⅰ』（教育出版センター、一九八一年）編注は、「劇詩『ピパは過ぎ行く』Pippa Passes (1841) の第一幕「朝」で少女ピパがうたう歌。（中略）標題の振仮名は初版では「春の朝」となっているが、（中略）五版（大10・4）では「朝」に改められている」という。「Pippa's Song」は平井正穂編『イギリス名詩選』（岩波書店、一九九〇年）収載。

④三省堂出版（1958年度より三省堂）

『中等国語（改訂版）三上』、⑤中国 968：1952～1958／④『（三訂版）』、⑤中国 936：1955～1961

／④『（四訂版）』、⑤中国 982：1957～1961／④『中等国語 五訂版 三』、⑤中国 A-908：1960～1961

④光村図書出版

『中等新国語文学 3上』、⑤中国 955：1952～1954

／④『中等新国語文学編 三上』、⑤中国 932：1955～1959／④『中等新国語三』、⑤国語 907：1962～1965、国語 905：1972～1974

④中央書籍

『新制中等国語文学編 第二学年用』、⑤中国 884：1953～1957

④日本書籍

『山本有三編集 国語総合編 中学3年の2』、⑤中

国 9.910 : 1954~1961

④ 学校図書

『中学校国語 三上』、⑤中国 9.938 : 1955~1956 /

④ 『同』(改訂版)、⑤中国 9.968 : 1957~1961、⑥

標題は「序詩 春の朝」

④ 愛育社

『中学の国語 三上』、⑤中国 9.926 : 1955~1957、

⑥ 標題は「春の詩」

④ 秀英出版

『私たちの国語 三上』、⑤中国 9.964 : 1956~1961

④ 二葉

『中学国語総合 三年上』(改訂版)、⑤中国 9.960 :

1956~1961

④ 教育出版

『改訂版 総合中学国語 三の上』、⑤中国 9.956 :

1956~1957

④ 中央図書出版

『国語 三 総合中学校用』、⑤中国 9.988 : 1958~

1958

④ 開隆堂出版

『国語 三』、⑤国語 9013 : 1962~1965

④ 大日本図書

『私たちの国語 三』、⑤国語 9012 : 1962~1965

Ｃあげびり：三好達治

(詩句全文を第三節に引用)

①詩。②みよしーたつじ、1900~1964。昭和時代の詩人。大阪市生れ。『詩と詩論』に参加、のち堀辰雄らと『四季』を創刊。伝統詩を継承し、現代詩における純粋な叙情性を追求した。詩集『測量船』、『南窗集』、詩論集『諷詠十二月』など。③三省堂教材末尾に「三好達治詩集『春の岬』による」とある。教育図書は『山果集』による」と注記する。『三好達治全集第一巻(筑摩書房、一九六四年)は、「揚げ雲雀」の典拠を『間花集』(※書名第一字は異体字。門構えの中は「月」とする。高橋陸郎「花をひろう 雲雀(二)」(朝日新聞、二〇一二年三月一〇日)も、傍線部のように記す。

…三好達治(中略)は、第一詩集『測量船』(昭和五(一九三〇)年刊)で、さまざまな詩形を試行した後、『南窗集』(昭和七年)、『間花集』(同九年)、『山果集』(同十年)と四行詩時代に入る。その中から雲雀の登場する二篇を拾おう。「友を喪ふ四章」(『南窗集』)「展臺」と「揚げ雲雀」(『間花集』)と。

三省堂教科書にいう『春の岬』は、『測量船』、『靈』、『南窗集』、『間花集』、『山果集』の合本詩集である(『詩集』春の岬)(創元社、一九三九年)のことであろう。教

育図書教材末尾の注記は存疑。

- ④三省堂出版 『中等国語(改訂版) 一上』、⑤中国 772 : 1952~1958 / ④ 『中等国語(三訂版) 一上』、⑤中国 74738 : 1955~1961
- ④教育図書 『中学標準国語 二上』、⑤中国 873 : 1953~1959 / ④ 『改訂版 中学標準国語 二上』、⑤中国 8847 : 1956~1961
- ④学校図書 『国語中学二』、⑤中国 A907 : 1960~1961
- ⑥三社とも、教科書冒頭(目次の前後)に掲出。教育図書の指導書はその「扱い方」について、「単元外のものであるから、表紙、口絵、目次の線に連なる所のものでみたい」という。

D ひばりに(雲雀に) : ワーズワース(田部重治訳)

(靈妙なる楽人、空の巡礼者、憂いのみつる地上をなれはさげすむや。または、翼は空高く舞いあがれど、) ①詩。② William Wordsworth 1770~1850。英国の詩人。自然と人間との靈交をうたい、ともに湖畔詩人と呼ばれたコールリッジとの共著『叙情民謡集』はロマン主義運動に一時期を画した。ほかに自伝的長詩『序曲』など。*③ 『ワーズワース詩集』(田部重治選訳、岩波書店、一九三八年)、

- ④ 光村図書出版 『中等新国語文学 3上』、⑥中国 955 : 1952~1954、中国 9932 : 1955~1959
- ④ 東京修文館 『中学生の国語 三下』、⑤中国 998 : 1953~1956
- ④ 愛育社 『中学の国語 三上』、⑤中国 9927 : 1955~1957

E (イ) 舞ひたつと羽づくろいする口こもりの ひばりの声は
草むらに聞ゆ : 若山牧水

(ロ) 雨雲のなかにまひのぼり啼く声の ひばりはしげしげ
よひ晴れなむ : 同

(ハ) ひばり啼く空の青みのけぶらひて 心うら悲し庭に立
ちつつ : 同

①短歌。②わかやまーぼくすい、1885~1938。明治~昭和時代前期の歌人。平明流麗な歌風で、旅と酒の歌人として知られる。紀行文や随筆もおおい。宮崎県出身。歌集に『海の声』『別離』『死か芸術か』など。

*③以下は『若山牧水全集』の歌集解説による。

(イ) 『全集8』増進会出版社、一九九三年。『くろ土』(第十三歌集。一九二二年三月、新潮社刊) 所収。「静かなる旅をゆきつつ」(紀行文。一九二二年七月、アールス刊)にも所収。

(ロ)の典拠は(イ)に同じ。「静かなる旅をゆきつつ」所収歌は「雨雲の空にのぼりて啼きすます雲雀はしげし晴近からむ」とあり、(ロ)と小異あり。

(ハ)『全集10』一九九三年)『山桜の歌』(第十四歌集。一九二三年、新潮社刊)所収。

④教育図書『中学標準国語 三上』、⑤中国976:1953~1960/④『改訂版 中学標準国語 三上』、⑥中国9949:1956~1961。⑥「詩歌の鑑賞 三、春の声(短歌・俳句)Ⅰひばり…若山牧水」として五首が載り、その中三首がひばりを歌う。

F ひばりより上にやすらふ峠かな…松尾芭蕉

①俳句。②まつおーはしよう、1644~1694。江戸時代前期の俳人。作句は没後、『冬の日』『猿蓑』『炭俵』などの七部集にまとめられた。伊賀(三重県)出身。
*③『校本 芭蕉全集』第一卷(富士見書房、一九八八年)一四四頁は

躋峠ほだたけ たかのみね〈多武峰ヨリ龍門りゅうもんへ越道也こす〉

雲雀より空にやすらふ峠哉 (笈の小文)

雲雀より上に休らふ峠かな 翁 (卯辰集)

雲雀より上にやすらふ峠かな 芭蕉 (曠野)

と掲出し、その頭注に

『蕉翁句集』には『笈の小文』と同句形で載せ、そ

の草稿に『曠野』の句形は誤りだという。「芭蕉庵小文庫」・『泊船集』には「卯辰集」と同句形で載る。「空」が後案かと思われる。句としても「空」の方がよいとする説が多い」という。学校図書『中学校国語教師用書(三年用)』三〇頁に、「雲雀より上にやすらふ峠かな―貞享五年の「笈の小文」にある句」とあるが、「笈の小文」は「空にやすらふ」。教科書収載句はいずれも「上」である。

④教育図書『中学標準国語 三上』、⑤中国976:1953~1960/④『改訂版 中学標準国語 三上』、⑥中国9949:1956~1961。⑥「詩歌の鑑賞 三、春の声(短歌・俳句)Ⅱ山路 松尾芭蕉」として五句が載り、その第五句目。

④学校図書『中学国語 三上』、⑤中国979:1953~1954、中国9938:1955~1956/④『中学校国語 三上』(改訂版)、⑤中国9968:1957~1961。⑥「俳句の世界 三 ひばり 松尾芭蕉」として九句掲出し、その第一句。

G ひばり…河竹繁俊

(春の初めから初夏にかけて、わたくしの毎朝の楽しみは、チーチク、チーチクと空高く鳴きたてる…)

①随筆。②かわたけーしげとし、1889~1967。大正

昭和時代の演劇学者。著作は『日本演劇全史』『歌舞伎史の研究』など。長野県出身。③教材末尾に「―」放送随筆」河竹繁俊の文による―と記す。指導書に「放送随筆」は、多くの人々の短い随筆を、一人一編ずつ治めたもので、もとラジオで放送したものに手を加えたのである。昭和二十八年七月NHK編集、日本出版共同株式会社の発行である」とある。『放送随筆』（日本放送協会編、日本出版協同、一九五三年）に、河竹の随筆「瀬鳴り」「雲雀」「富士山」が載り、その一つ。表記を除きほぼ原文どおりであるが、冒頭近く、『万葉集』大伴家持歌につづく、夏目漱石『草枕』にみえる雲雀の描写にふれた一節が教科書では省かれている。④「一葉」『中学国語総合 二 年上』、⑤中国 8845：1955～1961。⑥冒頭部分に「…むろん、雨の日は鳴かない。雨の日に鳴かないのも道理で、ひばりという名の起りを調べてみると、「日晴れ」から出ているという。だから、からりと晴れた日でなければ、鳴きつつ飛びあがらないのである。」とある。しかし、稿者は曇天に飛び鳴く姿を見たことがある。E(四)の牧水歌もある。中西悟堂『若山牧水の鳥の歌』(短歌研究、一九七〇年。『若山牧水全集5』収載)は、牧水は六一種もの鳥を詠んでおり、「それも一首々々が実際に見た写真であり、同時に抒情である」と評している。

日さくらとひばり…室生犀星

(詩句全文を⑥に引用)

①詩。②むろうーさいせい、1889～1963。大正～昭和時代の詩人、小説家。『愛の詩集』『抒情小曲集』を発表、叙情詩人として出発。のちに小説も発表。『性に眼覚める頃』『幼年時代』『あにいもうと』『杏っ子』など。石川県出身。*③『抒情小曲集』(感情詩社、一九一八年)「桜と雲雀」。『室生犀星全集1』(新潮社、一九六四年)収録。④秀英出版『私たちの国語 一上』、⑤中国 7765：1956～1961。⑥教科書目次の次に「序」と題して揭示。指導書に「序詩の位置づけ」と題して「(前略)中学生という新しい環境にはいった今、国語学習の開始に当って、春の明快な詩を鑑賞し、今後の国語学習に潤いと希望を与えるように指導したい」という。「昭和三十一年三月二十五日発行」の教科書本文は次のようである。「ひばりひねもす／うつらうつらとなけり／うららかに声はさくらにむすびつき／さくらすんすん(すんすん)のびゆけり／さくらよ／わがしんじつを愛せよ(感せよ)／らんまんとそそぐ日光にひろがれ／あたたかく楽しき春の／春の世界にひろがれ」(一)内は『抒情小曲集』。波線部の教科書の誤植も見過ごせないが、一・二行目、特に「うつら

うつらと」(原詩も同様)という雲雀の鳴き声の形容には違和感がある。山本健吉監修『大歳時記 第一巻 句歌春夏』(集英社、一九八五年)に「うらうらに照れる春日にひばり上がり心悲しもひとりし思へば 大伴家持『万葉集』」および「うらうらと天に雲雀は啼きのほり雪斑らなる山に雲みず 斎藤茂吉」が載る。茂吉歌は大正二年刊『赤光』「死にたまふ母其三」(岩波文庫『赤光』一〇六頁)に収載、『抒情小曲集』は大正七年の刊。家持詠歌の影響下に茂吉歌がなり、さらにその茂吉歌の「うらうらと啼き」の変奏として、犀星の詩句「うつらうつらと啼く」がなつたか。しかし、茂吉歌の場合、「うらうらと」は「のほり」に懸かり、異様な表現ではない。

I ひばりの子・庄野潤三

(第三節に冒頭部引用)

①小説。②しょうのーじゅんぞう、1921～2009。昭和後期～平成時代の小説家。児童文学作家庄野英二の弟。「第三の新人」の一人。『プールサイド小景』で芥川賞受賞。家庭のさびやかな日常を描き続ける。他に『静物』『夕べの雲』『絵合せ』など。*③「ひばりの子」は『ザボンの花』全一六章のうちの第一章。i 『ザボンの花』(近代生活社、一九五六年)とii 『庄野潤三

全集2』(講談社、一九七三年)とでは異同があり(その他の版もあるが未確認)、大修館書店1988・光村図書1972はi(両者には小異あり、光村図書がより正確)、光村図書1978はiiによる(三省堂、大日本図書、大阪書籍、学校図書の教科書は未確認)。

④大修館書店『新中学国語総合 新訂版 一下』、⑤中国7-792:1958～1961/④『新中学国語 一』、⑤国語7005:1962～1965

④三省堂『中等国語 五訂版 三』、⑤中国A-908:1960～1961/④『中等国語 三』、⑤国語9009:1962～1965/④『中等国語 新訂版 二』、⑤国語8022:1966～1968

④大日本図書『中学校国語 一年』、⑤国語7001:1962～1965

④大阪書籍『中学国語 一』、⑤国語7017:1962～1965 国語7026:1966～1968

④学校図書『中学校国語一』、⑤国語7018:1966～1968

④光村図書出版『中等新国語一』、⑤国語705:1972～1974 国語709:1975～1977 国語715:1978～1980

II 一九六〇（昭和三五）年度以降使用開始

（発行者別では新規の採録開始があるが、作品単位では新しい作品の採録はなし）

III 一九七〇（昭和四五）年度以降使用開始

J 春

- ①②③は小学校「春」に同じ。④学校図書「中学校国語 一一」⑤国語808：1975～1977 国語813：1978～1980

三、小・中学校国語教科書にみるひばりの描写

— 停空飛翔しながらのさえずり を中心に —

「JapanKnowledge」を使う、「鳥」「停空飛翔」をアンド検索すると、カワセミ、ケアシノスリ、チョウゲンボウ、ノスリ、ハイイロチュウヒ、ミサゴなどがみつかるとなる（鳥名は日本大百科全書（ニッポニカ）の項目）が、いずれも獲物をねらう際の行動である。『岩波 生物学辞典 第5版』は、「静止飛翔」の見出しで「『同』停空飛翔」とあり、「チョウゲンボウ、ミサゴ、コアジサシ、カワセミなどが、飛びながら地

表や水面下の食物にねらいをつけるときによく用いる。停空時間は一般に数秒、ハチドリ類はこの飛び方に特殊化しており、花の前の空中で長い間とどまり続けることができる」との説明がある。ハチドリを除いて、停空時間は短いようである。鳴き声と停空飛翔との関係は明示されていないが、獲物に敵（捕食者）の存在を気づかせるようなことはしないはずであり、停空飛翔の際には鳴かないものと思われる。

上記の文献ではヒバリがあがっていないが、清棲幸保『日本鳥類大図鑑・増補改訂版第1巻燕雀目―雨燕目』（講談社、一九七八年）に「翼を緩慢に羽ばたいて飛翔し、さえずりながら領域から垂直に上昇し、昇り切ると翼を激しく羽ばたいて停空飛翔をし、さえずり終わるとまっすぐに領域内に舞い降りるのが常である。巣にもどるときには横飛びしてひらりひらりと飛翔する」（三七五頁）とある。

内田清之助『ばあどろあ』「雲雀の話」（東京出版、一九四七年）に次のようにいう（『季節の鳥』縄書房、一九五〇年）も同内容）。

雲雀が空高く舞ひながら囀ることは、他の鳥と異なる著しい特徴で、（中略）空に数分間、うたひながら停止してゐる。（中略）空で鳴く時間は長くて数分間である。中国人は雲雀を飼ひ馴らして籠から放し、空中で鳴かせ、鳴き終わるとそれをまた籠へ収容するといふ遊びをやる。日本でも中国から伝はつてやつてゐるが、これを「揚

げ雲雀」といひ、屢々その競技も催される。競技では滞空時間が数分乃至十五分に及ぶこともあるが、これは人為的に然らしめた例外で、天然の雲雀の場合にはそれほど長いものではない。(三二六―三八頁)

また、樋口・森岡・山岸編集『日本動物大百科第4巻鳥類Ⅱ』(平凡社、一九九七年)にも「ヒバリのもつとも顕著な特徴は、空に舞い上がりさえずることである。春、草原や農耕地の上空高くから聞こえてくるヒバリの声は季節の風物詩のひとつとなつている」(六九頁)とあり、さえずりながらの停空飛翔はヒバリの特徴といつてよいようである。ただし、同書に「ヒバリは空中でさえずると思われがちだが、巣づくりの初期以外は地上でさえずることのほうが多い。空へ昇るときは、さえずりは、上がり、舞うときは、空鳴き、下がるときは、降りといつて区別する」(七一頁)との注意がある。なお、「揚げ雲雀」の語があるが、前掲の内田著には破線部のような説明があり、『デジタル大辞泉』は「空高く舞い上がつて鳴いているヒバリ」、『日本国語大辞典』は「ヒバリが空に高く舞いあがること。また、そのヒバリ」とする。語義が必ずしも定まっておらず、小稿ではあえて「停空飛翔しながらのさえずり」という直接的な表現を用いる。

以下、右にみてきた小・中学校国語教科書から「停空飛翔しながらのさえずり」に関する描写(直結する記述に傍線を施した)を抄出する。※印は稿者の注記である。

c ひばりのたまご(『国語の本 五年上』中教出版・小国2008) ぼくは、ひばりのすにたまごをかえし、またものあぜの下に来て、／ひばりの鳴いている青い空を見上げた。／空には一だんと高い鳴き声がある。(※後半部分の一節)

e やさしいひばり(『こくご 2年上』日本書院・小国2008) はるが、きました。／よあけのひばりが、空にたかくのぼり元気にうたをうたっていました。(※冒頭部分)

f ひばり(アイヌのでんせつ)(『小学新国語』光村図書出版・国語4011) 今でも、ひばりは、「わたしは、ちゃんと使いをはたしてきました。どうか、天上へのほらせてください。」と鳴きながら、空高くのぼっていくということである。 ※天の神様に仕えて天上に住んでいたひばりが、景色にみとれ、使いの途中、地上に一晚泊まってしまう、二度と天上にもどることを許されなかった。

h ひばりの話(『国語 三年下』二葉・国語3003) あたたかい春の日に、雲にとどくほど高い空から、「ピーチュル、ピーチュル。」と、ひばりの楽しそうな声が聞

こえてきます。ひばりは、どうしてあんなに鳴きつづけるのでしょうか。(※冒頭部分)

k **ヒバリと風船** (『小学新国語 六年上』光村図書出版・国語(643))

空には、ひばりが、息も切らずに鳴き続けています。ひばりは、同じ所ではばたいて、鳴いています。(中略) わたしは、細く開いた指の間から青い空を見上げ、ひばりを見つめていました。ひばりは、指と指とにしきられた細い空の中で、ピーチク、ピーチクと、せわしく鳴き続けています。(中略)「そら、鳴き声が弱くゆるやかになったから、もうじきおいてくるぞ。」わたしは、手を目からはなして、きつとなつてひばりを見つめました。(※冒頭部分)

↑ **天のふえ** (改訂 標準国語 六年上) 教育出版・国語(608)

(*) ピーチピーチ、ピチピチ、リートル、リートル。／何度も何度も、ひばりは、あきらめて落ちそうになりながら、けれどもあきらめずに羽ばたきを続けて、ぐんぐん、ぐんぐん上つていった。

(**) そして、その暖かく明るい春の空に、ひばりがみんなのために命がけてふいた天のふえだけが、いつまでも、いつまでも鳴っていた。／ピーチピーチ、

ピチピチ、リートル、リートル……。

※(*) は、雪に閉ざされてしまった世界を救うため、ひばりが太陽のかけらを取りに、天に上つていく場面。(**) は、作品の末尾。焼け死んだが使命をはたし、春をもたらしたひばりの鳴き声がいつまでも天に響いている。前者はさえずりながら上昇するひばり。後者は「停空飛翔しながらのさえずり」そのものではないが、高くにいるひばりの姿が捉えにくいこと(pヒバリヒバリの※印参照)をもふまえた描写であろう。

m **ひばり** (『新編 新しい国語 3上』東京書籍・国語(332))

ひばりが、空に上つたり、地上に下りたりするときは、ふつうの鳥と少しかわつたとび方をします。ちょうどヘリコプターのように、まっすぐに上り下りすることができず。そして、空中にとどまっていることもできるのです。

空高く上つて、いろいろな鳴き方でさえずるのは、おすのひばりです。草むらからとびたつたひばりは、ぐんぐん空に上りながら、「ピーチク、ピーチク」とくり返しさえずります。空に上ると、風のふいて来る方に向かつてはばたきをしながら、つぎつぎに鳴き方をかえてさえずりつづけます。空から下りるときは、さあっと、一直

線に下りて来ますが、そのときも休まずにさえずっています。

おすのひばりがさえずるのは、「ここは、わたしたちがいる所だぞ。ほかの者は近づいてはいけないぞ。」と、自分たちのすむ所を、ほかのひばりに知らせるためなのです。

※他にも、ひばりの足の、後ろを向いている指の「二センチメートルもある、まっすぐにのびたつめ」の役割など、わかりやすくて確かな説明がなされている。現在でも学ぶことの多い、上質の説明文である。

○ひばり（『小学校国語 三年上』学校図書・国語335）

ついついついつい／はたけのむぎのほ／おしりをさすので／ひばりは空からおりられない。／／じゅびびびびじゅびび／ たすけて！ たすけて！／よんでもよんでも／だあれもこない。／つかれてつかれて／ひばりは風にながされる。／／じゅびびびびじゅびび／ さよなら！ さよなら！

※詩句全文。／／は空行。傍線部は、ひばりが空でさえずりつつけるのを、とがった麦の穂に刺されるのがいやなので、とみなした表現。にぎやかで、せつぱ詰まったようにも聞こえる鳴き声とその変化の描写もたくみと思う。

P ヒバリ ヒバリ（『小学国語 3上』大阪書籍・国語305）

（「ピイピッ、ピイピ。ピイピッ、ピイピ。」）

ヒバリの声が、空からこぼれてきました。（中略）

タカシは、目を細くして空を見上げました。近くにいるようなのに、見つけれません。

でも、一度目をとじてそれからあけたとき、頭の上の黒い点を見つけました。さえずりながら、もつとのぼつていきます。

※冒頭部分。鳴き声が「空からこぼれて」きても、その姿をすぐには見つけられない、との描写はよくわかる。加齢で飛蚊症があると「黒い点」はなおさらまぎらわしい。

A 佐吉とひばり（『国語 中学校第三学年用 一』教育図書・

中国910）

私たちは飛びたつときからあいずをします。そして、大気が清くすがすがしい、ここいらと思われの高さのあたりまで達したとき、目あてもなしに左右へ飛び流れながら更にあいずの鳴き声が続けます。

※ひばりが佐吉に話す、「ひばりの果たさなければならぬ仕事」の一節。

B 春の朝（『中等国語 三上（改訂版）』三省堂出版・中国

963) あげひばりなのりいで（※詩句第五行目）

C あげひばり（『中等国語 一上（改訂版）』三省堂出版…

中国 772

ひばりの井戸は天にある…あれあれ／あんなにひばり
はいそいと水をくみに舞いあがる／はるかにすんだ青
空の あちらこちらに／おきき 井戸のくるるが鳴って
いる（※詩句全文）

D ひばりに（『中等新国語文学編 三上』光村図書出版…中

国 9323)

耀く大空こそ、なれの浮世うきよ離れたるすみか。／かしこよ
りなれは一きは聖なる本能もて、／うるはしの歌声をあ
ふるるばかりこの世に注ぐ。（※第二連の一部）

E（若山牧水短歌）（『中学標準国語 三上』教育図書…中国

976)

雨雲のなかにまひのぼり啼く声の ひばりはしげしこよ
ひ晴れなむ

G ひばり（『中学国語総合 二年上』二葉…中国 8845)

わたくしは幾度か、揚げひばりのゆくえをたずねたもの
である。（中略）ひとみをこらして見つめてみると、木

の葉のようにひらひらと舞いあがるひばりの姿が目には
いる。らせん状に円を描きつつ、忙しく鳴きたてながら
舞いあがってゆく。…はたと鳴きやんだと見るまに、斜
にすうつと地上に降りる。

I ひばりの子（光村図書出版『中等新国語 一』…国語 715)

その声は、不意に正三の頭の真上で聞こえた。

それは、うれしくてたまらないような、本当にかわい
らしい声であった。その声は、正三の頭の真上の空から、
いきなり動きだしたぜんまいじかけのおもちの自動車
か何かのように、勢いよく鳴りだしたのだ。

それを聞いた時、正三は思わず立ち止まって、「あ、
あのひばりの子だ。」と言った。（中略）

すると、ちょうど頭の真上のあんまり高くはない所に
飛んでいる、一羽のひばりが目に入った。

それは、たいへんせわしそうにさえずりながら、その
声と全く同じくらしいのせわしきで、小さい羽を動かして、
まるでやつとこさ空に引つかかっているというふうに見
えた。（中略）

そのとき、ひばりの声の調子が変わった。三つくらい
の音色をつづったような鳴き方をしていたのが、二つの
音色だけになり、それまたいへんあわてたように聞え始
めた。

※右に掲出した、書き出しとそれにつづく部分の一節は、「ひばりの子」の様子という点をのぞけば^(註)、ひばりの鳴き声が「不意に」「頭の真上で」聞こえたこと(ひばりの上昇に最初から気づいていなければ、このように感じることはごく自然である)をふくめ、にぎやかでせわしない鳴き声と停空飛翔の様子、上昇と下降の声の違いなどを注意深く観察した描写である。

④ 光村図書出版『中等新国語 教師用指導書 1上』(一九七二年および一九七八年)は、「◇参考資料」の項で「かえったばかりのひばりの子が高く飛び上がってさえずるといふのは実際にはあり得ず、都会育ちの正三がひばりの成鳥、少なくとも孵化後半年以上たったものを、ひなと誤ったものである」と指摘し、作者庄野の「『ひばりの子』という認識は、正三にとって詩的・真実」だという言葉をも引用し、「以上の点をふまえ、特にひばりの生態をよく知っている生徒のいる場合には補説することも必要であろう」と述べる。

n 春・J 春(光村図書出版『国語 五上 銀河』:『国語 51』) おかんはたった一人／峠田のてっぺんでくわにもたれ／大きな空に／小ちゃいからだを／びよっくり浮かして／空いっばいになく雲雀の声を／じっと聞いている

やろで／／里の方で牛がないたら／じっとひびきに耳をかたむけているやろで／／大きい 美しい／春がまわってくるたんびに／おかんの年がよるのが／目に見えるようで かなしい／おかんがみたい

※詩句全文。坂本遼「春」をあえてこの節の最後にあげた。こうしてひばりの描写をたどってくれば、傍線部が「停空飛翔しながらのさえずり」以外の何ものでもないことは贅言を要しないであろう。詩の短い一節でありながら、光景を一筆で描ききって強い印象をあたえる表現となっている。m ひばり(砂村秀治、説明文)やI ひばりの子(庄野潤三、小説)の、文章による積み重ねにも匹敵する優れた表現であると考える。ところが、従来そのようには評価されてこなかった。このことについては別に論じたい。

おわりに

第一節、第二節で扱った作品の採録状況を概観する。

(凡例)

1. 表1は、同じ作品でも発行者(教科書会社)ごとに計上し、その年度における発行者の数を表示した。

例・B (春の朝・春のあした)、一九五二年度は三省堂出版・光村図書出版の二社が採録し、「2」と表示。

一九五六年度「9」は九社が採録していることを示す。

- なお、三省堂出版（三省堂）『中等国語 三上』の使用年度は「改訂版1952～1958、三訂版1955～1961、四訂版1957～1961、五訂版1960～1961」とあるが、各版の使用年度の重なりは考慮せず、「1952～1961」と一括して扱った。
2. 表2は、作品単位で扱い、右のBでいえば、一九五二・一九五六年度ともに「1」と表示した。
 3. 一〇年ごとの採録数の累計を右端に表示した。
 4. 全期間を通した累計が15以上の作品に網かけを施した。

*

表から汲みとれることをまとめてみる。

- 一〇年ごとの採録数の累計をみると、一九五〇年代をピークにして、以後、ひばりの登場する教材が加速度的に減少し、二〇〇〇年代ではついに姿を消す。表2に顕著であるが、作品単位でみた表1でもそのことは変わらない。

小、中学校の別でみると、中学校の方が圧倒的に早くにひばり関連教材が減少している。その理由を明かすためには、国語教科書全体の変遷の様相を把握しておくことが求められる。以下は、その用意を欠く、表層的な覚え書きである。

まず、一九六〇年代までのピーク時にあっても、C（あげひばり…三好達治）、H（さくらとひばり…室生犀星）のように、教科書の「序」として単元外の扱いのものが含まれ、教材としての比重は、割り引いて考える必要があるかもしれ

ない。

A（佐吉とひばり…中村草田男）は、現在では登場人物の呼称にことわりが必要となる。

さらに、もつとも多い時には九社もの教科書に採録されたB（春の朝…ブラウニング、上田敏訳）やそれに次ぐD（ひばりに…ワーズワース）は文語調の訳詞である。F（ひばりより上に…松尾芭蕉）は古典俳句であり、E（若山牧水短歌三首）も表現は文語である。この点、小学校教材の場合、i（ひばりの日記…著者不明）が代表的であるが、c（ひばりのたまご…村山俊太郎）、e（やさしいひばり…浜田広介）、j（ひばりのす…木下夕爾）、k（ヒバリと風船…石森延男）、p（ヒバリ ヒバリ…加藤多一）など、多くが児童文学であり、小学生が同化しやすい語り口になっていることと対照的である。小学校と中学校との相違なのであるが、教材としての根強さの違いがあるようにも思われる。もつともBについては、光村図書出版が一九七〇年代に復活させてもおり、人口に膾炙した名訳詞としての生命力を感じさせる。しかし、中学校教材としてB以上に、もつとも長期間にわたって採録された（表1参照）のがI（ひばりの子…庄野潤三）であることに注意したい。Iの主人公「正三」は小学四年生であるが、「四年生ともなれば、宿題もたくさんある。なつめのよいうな二年ぼうずとは、ちょっと違うのだ」（なつめは妹、その下に幼児の弟がいる）という自負を持っている。上級生の

いじめつ子らしき少年との対決という事件を含め、中学生目線でも正三を受けいれやすいであろう。

一方、小学生が同化しやすい語り口の教材は、小学生をとりまく環境の変化の影響を受けやすくもある。ここでは「ひばりの日記・著者不明」がわかりやすい事例であろうが、現実のひばりがなじみの薄い存在になりつつある現在、こうしたひばりの巢の観察日記風の作品を採録することは考えがたい。小学校教材としてはもともと長期間にわたって採録された（表1参照）教材はn（春・坂本遼）であるが、この教材は中学校教材Jとして先行採録されたことにも示されるように、その語り手は親元を離れて暮らす人物であり、説明文を除く他の小学校教材とは異質の存在である。小学校五年生対象の教材としてそのことがどこまで意識されていたかわからないが、小学校教材として長く命脈をたもった理由はそのあたりにも求められそうである。

付記 脱稿後、『中学校国語教科書内容索引：昭和24～年61度』（教科書研究センター、一九八六年）「ひばりの音曇天かき分けかき分けて（中村草田男）」を見落としていたことに気づいた。小稿の「凡例」の形で示せば、《③「来し方行方」（一九四七年、自文堂）所収。『中村草田男全集2』（みすず書房、一九八九年）二三〇頁に「雲雀の音曇天掻き分け掻き分けて」と載る。④日本書籍『山

本有三編集 国語 中学3年下』、⑤中国9-999：1959-1961。④光村図書出版『中等新国語（新版）一二』、⑤中国A-800：1959-1961』となる。第二節G（ひばり：河竹繁俊）⑥に述べたことに関わり、表1・2も補正する必要があるが、「おわりに」で述べた全体的な傾向には影響を与えない。

（いまい・しょうのすけ 本学名誉教授）

〈表1〉 作品採録状況：発行者単位集計

年度	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	計	総	
1950	1																1										2		
1951	1																1											2	
1952	1	1	1	1													1	2	1	1							9		
1953	1	1	1	1													1	3	2	2	1	2					15		
1954	1	1	1	1													1	4	2	2	1	2					16		
1955	1	1															6	2	3	1	2	1					17		
1956	1	1															9	2	3	1	2	1	1				21		
1957	1	1			1												9	2	2	1	2	1	1				21		
1958	1	1			1												7	2	1	1	2	1	1	1			19		
1959	1				1												6	2	1	1	2	1	1	1			17	139	
1960		1			1												5	3		1	2	1	1	2			17		
1961						1	1	1									5	3		1	2	1	1	2			18		
1962						1	1	1									3								4		10		
1963						1	1	1									3								4		10		
1964						1	1	1									3								4		10		
1965						1	1	1	1	1							3								4		11		
1966						1	1	1	1	1															3		7		
1967						1	1	1	1	1															3		7		
1968						1	1	1	1	1															3		6		
1969						1	1	1	1	1																	3	99	
1970						1	1	1	1	1																	3		
1971												2	1														3		
1972												2	1					1							1		5		
1973												2	1					1							1		5		
1974												2	1					1							1		5		
1975												2	1												1	1	5		
1976												2	1												1	1	5		
1977													1	1											1	1	4		
1978													1	1											1	1	4		
1979													1	1											1	1	4	43	
1980								1					1												1	1	4		
1981									1				1														2		
1982										1			1														2		
1983											1		1														2		
1984											1		1														2		
1985												1	1														2		
1986													1	1	1												3		
1987													1	1	1												3		
1988													1	1	1												3		
1989													1	1	1												2	25	
1990													1	1	1												2		
1991													1	1	1												2		
1992																2											2		
1993																2											2		
1994																2											2		
1995																2											2		
1996																											0		
1997																											0		
1998																											0		
1999																											0	12	
計	9	9	3	3	4	4	10	7	6	12	3	12	9	15	6	8	5	71	21	15	9	18	7	6	40	6			

〈表2〉年度別採録状況：作品単位集計

年度	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	計	総	
1950	1																1										2		
1951	1																1											2	
1952	1	1	1	1													1	1	1	1							8		
1953	1	1	1	1													1	1	1	1	1	1					10		
1954	1	1	1	1													1	1	1	1	1	1					10		
1955	1	1																1	1	1	1	1	1	1			8		
1956	1	1																1	1	1	1	1	1	1			9		
1957	1	1			1													1	1	1	1	1	1	1			10		
1958	1	1			1													1	1	1	1	1	1	1	1		11		
1959		1			1													1	1	1	1	1	1	1	1		10	80	
1960		1			1													1	1	1	1	1	1	1	1		9		
1961					1	1	1											1	1	1	1	1	1	1	1		10		
1962					1	1	1											1			1	1	1	1	1		5		
1963					1	1	1											1							1		5		
1964					1	1	1											1							1		5		
1965					1	1	1	1										1							1		6		
1966					1	1	1	1																	1		5		
1967					1	1	1	1																	1		5		
1968					1	1		1																	1		4		
1969					1	1	1	1																			3	57	
1970					1		1		1																		3		
1971										1	1																2		
1972										1	1							1							1		4		
1973										1	1							1							1		4		
1974										1	1							1							1		4		
1975										1	1														1	1	4		
1976										1	1														1	1	4		
1977											1	1													1	1	4		
1978											1	1													1	1	4		
1979											1	1													1	1	4	37	
1980									1					1											1	1	4		
1981									1					1													2		
1982									1					1													2		
1983									1					1													2		
1984									1					1													2		
1985									1					1													2		
1986									1					1	1												3		
1987									1					1	1												3		
1988									1					1	1												3		
1989														1	1												2	25	
1990														1	1												2		
1991														1	1												2		
1992																1											1		
1993																	1										1		
1994																		1									1		
1995																		1									1		
1996																											0		
1997																											0		
1998																											0		
1999																											0	8	
計	9	9	3	3	4	4	10	7	6	12	3	6	9	15	6	4	5	17	10	8	9	9	7	6	20	6			